

発達障害教育推進センター研修講義

高等学校における発達障害の ある生徒の指導・支援

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

笹森 洋樹



高等学校における教育の課題

- 高等学校への進学率は98%を超え、発達障害も含め多様な教育的ニーズのある生徒が在学
- 不登校の生徒は一定数あり、卒業後に進学も就職もしていない者も多数存在することは、ひきこもり等につながる社会的課題
- 課程や学科等の教育制度の多様化、学校設定科目・教科など教育課程の工夫、各学校や教員による個別的な指導で対応
- 高等学校においても、障害のある生徒に対し、障害による学習上又は生活上の困難を克服するための教育を行う旨が学校教育法に規定

高等学校教育部会（中教審）のまとめ

1. 生徒を取り巻く状況の変化

- ・生徒の多様化
- ・基礎学力の不足と学習意欲の低さ
- ・大学入試の選抜機能の低下

2. 学校・学科や教育課程の変化

- ・学校・学科等の多様化
- ・教育課程の多様化

質の確保・向上に関する課題・基本的考え方

- ・「共通性の確保」と「多様化への対応」

発達障害は関係性にかかわる障害

学習方略や教材の活用など学習能力に関すること
集団のルールなど社会的行動の習得に関すること
コミュニケーション能力、対人関係の形成・維持能力に関すること

人との関係、ものとの関係がうまくつけれない。

「親子関係」「友達関係」「学校の集団生活」など人間関係の円滑さが強く求められる社会では困難さがより顕著に。
一方で、気づかれにくい障害でもある。

気づかれにくい障害特性

- 失敗や困難さは、本人の経験や努力不足によるもの
- 努力すれば必ずだれでもできるようになる
- 決まった与えられた課題ができれば問題視されない
- 勉強ができれば対人関係や社会性もいずれ身につく
- 多少の場違いな行動は個性として認められてしまう
- 限られた人間関係の中では周囲の人たちがフォロー

場面状況に応じた対応、複雑な人間関係、セルフマネジメント力を求められることなどから社会人になり、気づかれる場合も。

思春期、青年期という時期

「子ども」と「大人」の共存

「親子関係」から「仲間関係」へ

「依存」から「自立」へ

「他律」から「自律」へ

「孤独感」と「思いやり不足」

「他者へ」の「過敏さ」

トライアル&エラーによる自己受容

発達障害と思春期、青年期

- 自分なりに見えてくる、違和感、疎外感の認識、人生がうまくいかないという気づき。見出せない対応策。
- 幼少期から思うように取り組めない失敗経験や叱責体験による低い自己評価、もちにくい「やればできる」という自己効力感。
- プライドの高さは傷つき体験の裏返し、高く保つバランス維持は、社会が求めている視点とは異なる自己理解。

思春期、青年期の捉え方と対応

- 学校、家庭、診察室で見せる子どもの姿、状態像、相手により場面により異なる実態。
- 抱える課題は生活環境から生じることから、子どもの生活環境、生活状況との関係で理解。
- 生まれつきの特性は違和感を自覚しにくい。場の空気
の読み方の違い、ズレに気づき調整。本人の読み方
を認めつつ、広げていく視点。

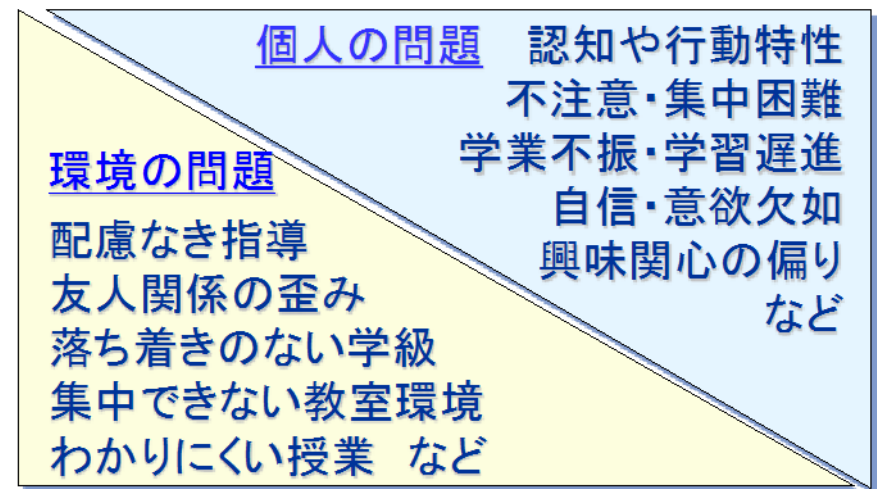
発達障害のある高校生の課題

- 他人と比較し短所に関する過剰な自意識
- 勉強ができないことで将来の希望の喪失
- 自己評価が低く学ぶことへのあきらめ
- 意思や自主性が尊重される難しさ
- 長期欠席 = 留年という意識の希薄さ
- 高校生としての当たり前前の未確立
- 失敗経験の積み重なりによる意欲の低下
- 困ったときに助けてくれる仲間の不在
- 自己責任への対応の難しさ

適応の困難さということ

- 適応の困難さとは個人と環境との関係が適合していないということ
- 適応の困難さへの対応は、個人を学校（環境）にあわせる視点と、学校（環境）を個人にあわせる視点の両面が重要
- 発達障害 = 不適応とは限らない

学校における不適応の要因



二次的な障害を予防する

やる気の問題、努力不足という無理強い
注意や叱責の繰り返し
失敗経験やつまずきの積み重なり

担任や保護者の
気づき

ストレス、不安感の高まり
自信や意欲の低下
低い自己評価、自尊感情

子どもの
心情理解

反社会的な行動、不登校などの諸症状

環境との相互作用の悪循環、日常的な不全感の把握

心の問題への対応

問題化する前に気づきたい、
生徒の不適応状態にあるという「サイン」。

「サイン」を見逃さないためには、ちょっと気になる様子
の共有化、共通理解。

問題となる行動は除去すべきという発想だけでなく、
本人の表現の仕方の一つという捉えも大切。

心身のバランスを考え、様子を見る、軽減を図る、
取り除くか。医療・福祉との連携も。

安心できる居場所

- がんばっても周困と同じようにできない生徒の存在
- 集団の団結と暗黙のルールや学級規律の強化
- 外れたとき、外されたときに居場所がなければ孤立
- 濃密な人間関係に存在するオリジナルの秩序
- 息苦しい秩序からの逸脱も保障できる居場所づくり

生徒理解の深化と信頼関係の構築

特別支援教育の視点からの生徒指導の充実

学びやすい環境づくり

○ 2つの場

物理的な場 と 心理的な場

(教室環境など)

(人間関係など)

○ 4つのサポート

情緒的サポート、情動的サポート

(安心感や意欲など)

(学び方や手立てなど)

道具的サポート、評価的サポート

(教材・教具など)

(ほめる、認めるなど)

授業の中で工夫していること

○比較的多い回答

「生徒の反応をみながら授業を進めている」

「教科書やノートの準備を事前に伝えている」

「目標やねらいをわかりやすく伝えている」

「ノートに写す時間を十分に確保している」

○比較的少ない回答

「集中しやすい学習環境を工夫している」

「生徒同士が認め合う機会をつくっている」

「話の聞き方、発言の仕方のルールを明示している」

「生徒にわかりやすい具体的な評価をしている」

支援が必要な生徒への対応

○大切だと思うこと

「生徒の質問に応じたり、やりとりしたりする」

「クラスの状況に応じて授業の進め方を工夫する」

「生徒のことを日頃から職員間でよく話し合う」

「日常的に生徒とコミュニケーションをとる」

○実施できていないこと

「医療、福祉、行政などの専門機関の助言を得る」

「生徒の学習状況に応じて評価を工夫する」

「生徒理解や特別支援教育の研修会を実施する」

「指導で悩んだとき相談できる人や場が校内にある」

自己理解から主体的な学びへ

本人の願い
(ニーズ把握)

学習方略
(認知・情意)

動機付け
(自己効力感)

メタ認知
(自己理解)

- ・自分でできること、苦手なことの整理
- ・見直す、確かめる習慣づけ
- ・アドバイスによる成功経験の蓄積
- ・修正や変更ができたことを評価
- ・それでいいというアドバイスも
- ・必ず誰かに確認、わからなかったら相談

指導・支援のポイント

肯定的な自己理解を育むこと

- ・認めてくれる仲間、支えてくれる大人
- ・安心できる人間関係

自己効力感を育むこと

- ・失敗しても大丈夫、何とかなる経験
- ・相談による問題解決の経験

ストレスにうまく対処する力を育むこと

- ・自分なりの気分転換と癒し
- ・共に過ごせる仲間の存在

発達障害教育推進センター研修講義

高等学校における発達障害の ある生徒の指導・支援

終わり

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

笹森 洋樹

